

CHI2002 参加報告

西本 一志 (北陸先端科学技術大学院大学)

中小路 久美代 (東京大学 先端科学技術研究センター)

2002年4月20日～25日にかけて、米国ミネソタ州ミネアポリスのコンベンションセンターにおいて、ACM主催のCHI2002が開催された。4月も下旬というのに、本稿著者の一人である西本が到着した日(4月21日)のミネアポリスの天候は雪、日中の気温が0°Cで、さすがThe American Refrigeratorと呼ばれる地だけのことはあった。その後天候は回復したものの、この寒さにはずっと悩まされ続けた。

20日～22日までの3日間はチュートリアルで、全部で32件のチュートリアルが開催された。本稿著者の一人である中小路は、Tutorial cochairとしてチュートリアル運営に携わった。本会議は23日～25日の3日間で、オープニングとクロージングを除いた残りの時間は、ロング/ショートペーパー、パネル、デモ、SIGなど常時8つのトラックがパラレルで走っており、かつポスター展示は全期間にわたって行なわれていた。日本からの発表は、ロングペーパーが3件、ショートペーパーが4件、ポスターが4件であった。

今年度の本会議の参加者は1100～1200名ほどで、前年度の2400名の約半分であった。この急激な落ち込みの原因は、New Comerと呼ばれる、初めてCHIに参加する人の落ち込み(昨年度は約450名、今年は約50名)と、昨年度が異常に多かったこと(Bill Gatesがキーノートであったことと、彼を警備するために大量のMicrosoftの社員の方がオンライン登録したこと)に起因すると見られている。しかしながら、著者らの感触としては、実質的

にはそんなに参加人数が減ったという感じは受けなかった。

さて、会議の内容について簡単に概観する。今回の会議で特に注目すべきは、Design PortfolioやInteractionaryという意匠デザインを中心とした発表セッションがはじまった点であろう。これは、昨年度あたりから「デザイン」の重要性を増そうという機運が高まってきたことの現れであると言えよう。また、今年のCHIは、AIGA(American Institute of Graphic Arts)という学会との共開催となったため、大勢のグラフィックアーティストが参加した。このためもあり、採択された論文にも可視化やデザインといった内容のものが増え、心理学一色だった2・3年前のCHIからかなり内容が変わってきている。85～90年前後のCHI会議の良さが復活した内容となり、いろいろな方々から、近年稀にみるよい会議だったとのコメントが出ていた。

ただ、Design Portfolioには質に疑問のあるような発表がいくつかあったが、これは、コンセプトプレゼンテーションをおこなう意匠工学系の文化と、技術や実装についてのプレゼンテーションをおこなう情報工学系の文化の違いで問題が起こっていたのであろう。しかしこれも、コンセプトデザインを発表するのであれば、それが非常によく練られたものであるかどうかをきちんと査読することで質の向上は可能であると思われる。

ここ数年のCHIは、ユーザ実験の有無で論文の採否が決定していた感があった。これは、

90年代以降のきちんとインタフェースを評価しようという流れによるものだったわけだが、この結果あまりにも評価／実験に偏って重点が置かれることとなり、肝心のシステム作りがおざなりになっているとの危機感があつたようだ。このため、一昨年あたりから徐々に Conference Committee などにデザイン関連の人が多く招かれるようになっており、2000年のHague開催から次第に方向転換してきた。それが今年になって大きく実を結びはじめていると見ることができらう。

もう一つ注目すべき点は、クロージング・プレナリの人選である。今年のクロージング・プレナリは、オーストラリアの著名なアーティストである Stelarc 氏¹による講演であつた。氏は、自分の身体をメディアとして Art と Technology の融合を実践しており、特に日本、欧州、米国において活発なアート・パフォーマンスを展開している。この講演では、氏の創作活動の背景にある深い哲学的思想について非常に簡潔にわかりやすく説明された。Stelarc 氏は 1999 年に英国ラフバラ大学で開催された Creativity and Cognition の会議でもキーノートスピーチをされており、その際にも本稿著者らは講演を聴くチャンスに恵まれたが、その時も今回も内容的に実に面白かつた。また、そのちょっとマッド・アーティスト風の講演スタイル(というよりもその独特の狂気を秘めた笑い)にも毎回圧倒される。ともあれ、このクロージング・プレナリの人選は、CHI の方向転換の一つの象徴として見ることもできらう。この意味でも、また内容的な面白さからも、彼を CHI2002 のクロージングに招聘したことは、非常に成功だつたと思う。

この他、Ubiquity, Group Spaces などのロングペーパーのセッション、Communication Media, It's All About Sound, Tools for Interaction, Supporting Collaboration などのショートトークセッション、Future Interfaces などのパネルを聴講して回つた。どのセッションもほぼ満席で、立ち見も多く、非常に活発な議論が展開されていた。ただ、いかんせん 8トラック並行のために聴講したいセッションの重複が多数あり、どうしても面白そうな発表の全てを聞けないことが残念であつた。しかし、全体としては非常に刺激的で示唆に富む会議であり、大いに楽しむことができたとともに、研究上でのいろいろなアイデアを得ることができた点で、非常に有益であつたと思う。自費での聴講のみでの参加でも損はない、数少ない会議のひとつであると言えるらう。

次回 CHI2003 は、フロリダ州の Fort Lauderdale において、2003年の4月5日～10日にかけて開催される予定である。この開催地は、日本人にはほとんど馴染みのない土地であるが、「アメリカのベニス」と呼ばれるヨーロッパの人々には結構有名なビーチであり、また米国人にとっては、学生が春休みに旅行するメッカの一つでもあるそうで、欧米における知名度はかなり高いリゾート地であるということである。また、CHI2004の予定もすでに決まっており、期間は2004年の4月24日～29日、開催地はオーストリアのウィーンであり、3度目の米国外でのCHI開催となる。

¹ Stelarc 氏についての詳細は、
<http://www.stelarc.va.com.au/> を参照されたい。